

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2025 年度
氏名	松田知子	指導教員 (主査)	諏訪絵里子准教授

論文題目	大学生の ASD に対する知識の獲得が ASD 学生への態度に与える影響
------	--------------------------------------

本文概要
【問題と目的】近年、ASD 学生数は増加し続けているが（日本学生支援機構，2023），彼らは対人関係の構築に困難を抱えやすく、それが疎外感や孤独感を高め、結果としてメンタルヘルスの問題につながることを示されている（Jackson et al., 2018）。ASD 特有の対人行動は周囲から否定的に解釈されやすく、社会的距離を生じさせる要因となる（Sasson et al., 2017）。社会的距離とは、個人や集団間の親近性や疎遠性を示す概念であり、排除や差別を示す指標とされる（Zeng, 2024）。ASD 特性が十分に理解されず、性格や態度の問題として捉えられた場合、社会的距離が大きくなることが指摘されている（Gillespie-Lynch et al., 2021）。そして、そのことが ASD 者の対人関係を一層困難にすると考えられる。これに対し、接触仮説理論では、当事者との接触が偏見の低減や社会的距離の縮小に寄与するとされている（Allport, 1954）。接触経験には、当事者との直接接触と、異集団に関する講義や読書などの間接接触があり（Dambrauskas, 2019）、両者は相補的に作用することが指摘されている（Wright et al., 1997）。接触経験は、知識の獲得や理解の精緻化といった変化と（Gillespie-Lynch et al., 2015）、接触による不安の低減や好意の喚起といった情動的側面の変化を介して態度変容につながることを示されている（Pettigrew, 1998）。そこで、本研究では、大学生の ASD 学生への態度を社会的距離の観点から捉え、教育などによる間接接触経験が、知識や好感度とどのように関連して態度に寄与するのか、また、その影響が直接接触経験の有無によってどのように異なるのかを検討する。これにより、ASD 学生および周囲の学生にとって過ごしやすい大学環境につなげるための一助とすることを目的とする。 【方法】大学生 153 名（男性 40 名、女性 110 名、その他 3 名、$M=19.6$ 歳、$SD=0.96$）を対象に、以下の質問紙調査を実施した。①フェイスシート（性別、年齢、学年）②ASD に対する好感度を 5 段階で評価した。③大学生の発達障害に関するメンタルヘルスリテラシー尺度（水野，2019）：ASD に関する知識項目のみを使用した。④発達障害者との接触経験（岡田，2023）⑤Broad Autism Phenotype Questionnaire 日本語版（酒井他，2014）⑥Social Distance of Adolescents Scale（肥田他，2018）：谷口他（2020）が作成したビネットに登場する ASD 学生に対する社会的距離について回答を求めた。 【結果と考察】相関分析の結果をもとに、間接接触経験を説明変数、知識と好感度を媒介変数、社会的距離を従属変数としたモデルを作成した。直接接触経験あり・なし群による、多母集団同時分析の結果、モデルの適合度は良好であった（GFI=.99, AGFI=.96, CFI=1.00, RMSEA=.00）。直接接触経験の有無にかかわらず、間接接触は知識と好感度を規定し、好感度は社会的距離を縮めていた。また、知識は直接接触がない群では社会的距離を増大させていたが、直接接触がある群では影響は見られなかった。このことから、直接接触経験が無ければ、知識はむしろ ASD 学生との関わりの困難さを想起させ、社会的距離を取ろうとする傾向を高めるのではないかと考えられる。一方で、直接接触経験がある場合には、具体的で個別的な理解が形成されることで、知識が不安や抵抗感に結びつきにくくなる可能性があると考えられる。さらに、間接接触は知識の獲得とは独立して好感度を高めることができ、そのことが社会的距離の縮小につながることを示された。すなわち、知識自体は否定的態度につながる可能性がある一方で、間接接触により情動的側面を媒介することで肯定的な態度につながることを示唆された。以上より、大学における心理教育においては、直接接触経験の有無を考慮し、単なる知識の提供だけでなく、好意や共感といった情動的側面に目を向けることが、一つの手がかりとなる可能性がある。